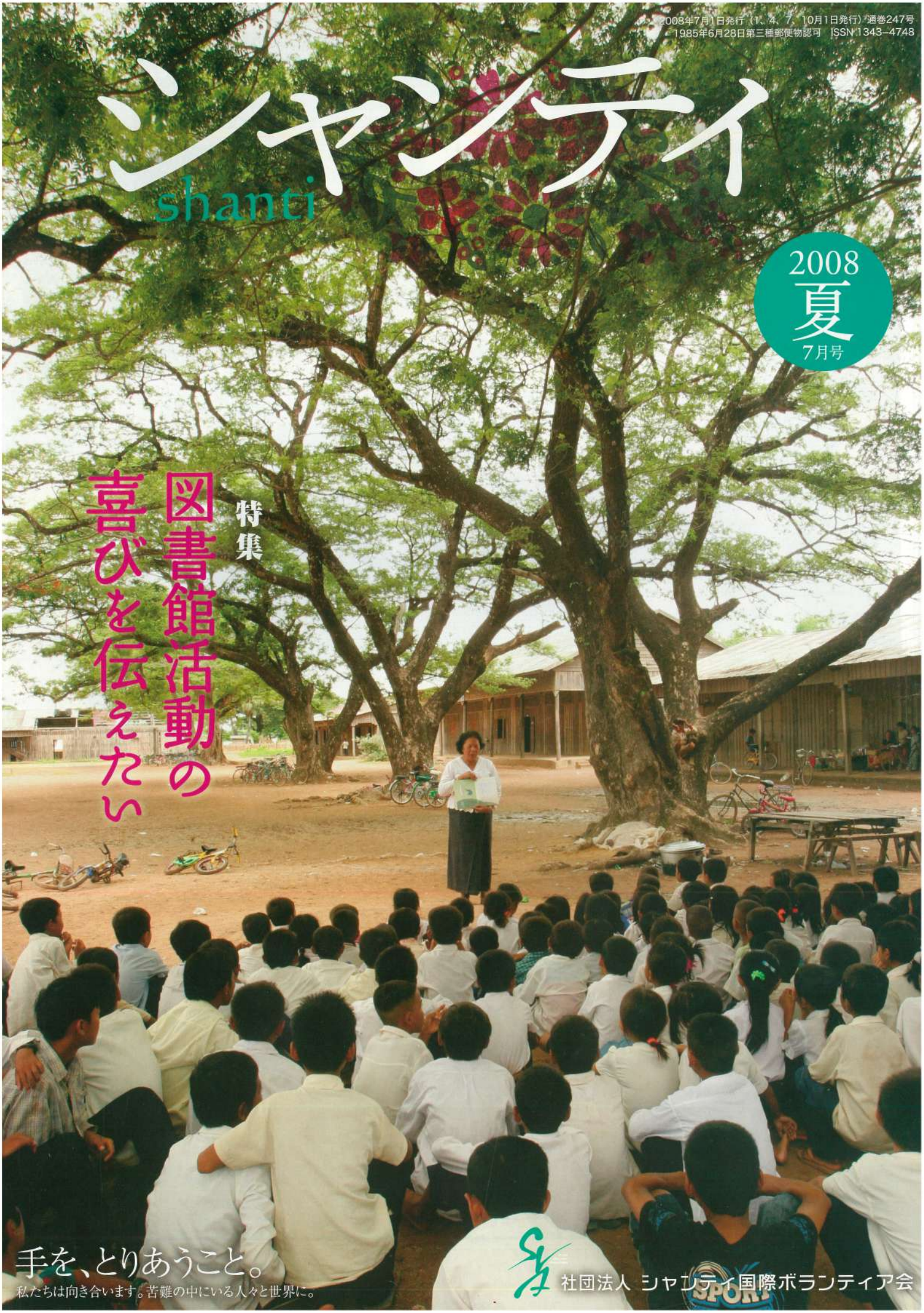
2008年7月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻247号
1985年6月28日第三種郵便物認可　ISSN 1343-4748

シャンティ
shanti

2008
夏
7月号

特集
図書館活動の喜びを伝えたい



手を、とりあうこと。
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

アフガニスタン〈子ども図書館のお誕生日会〉

Birthday Party in Afghanistan

❶子ども図書館に来る子どもたちは３才から 14 才位。毎日 100 人以上の子どもたちがやってきます。お誕生日会には 150 人位が参加し、おしゃれをしてくる子もいます。❷❸ステージでは子どもたち自身による絵本の読み聞かせや劇の発表があり、みんな楽しみにしています。❹誕生日を祝ってもらう子どもたちの代表がケーキを切ります。❺特別に昼食も用意し、みんなでいただきます。この日のメニューはご飯とお肉の煮込み。

子ども図書館では、日々の活動の他に月例の活動を行っています。中でも一昨年から開始された年４回のお誕生日会では、その期間に生まれた子どもたちの誕生を祝っています。

ほとんどの子どもたちは自分の誕生日を知りません。この会をきっかけに、生まれた日のこと、生まれた季節などを親に尋ねるようになりました。戦争中、多くの親は生きるのに精一杯で、子どもたちも家計を助けるために働いてきました。そんな子どもたちへ、「生まれてきてくれてありがとう」という思いを伝える会にできればと考えています。

誕生日会の進行は、年長の子どもたちが行います。劇をしたり、詩を朗読したり。それが終わると色鮮やかなケーキが子どもたちに配られます。手作り感いっぱいの誕生日会で、アフガニスタンの子どもたちの人生に、思い出に残るような日を作ってあげたいと、スタッフはこの会を大切にしています。

（アフガニスタン事務所長代行 山本英里）

表紙：カンボジアの小学校の校庭で移動図書館活動（撮影 白鳥孝太）

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって
苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、
その人々と共に解決のための活動を行います。
特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、
「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

巻頭言

道（みち）

就任のご挨拶

事務局長　関尚士（せきひさし）

この度、4月1日より事務局長を務めさせていただくこととなりました。私がSVAの活動に参加した1989年は、抑えきれない想いを抱えて諸先輩たちがタイの難民キャンプへと飛び込んでから10年。難民として祖国を離れた人々が、長期にわたった苦しみと困難を乗り越えてようやく自らの母国に帰還し始めた時でした。希望と不安、そしてかの地で亡くした親族の遺骨を抱きながら帰っていく彼らと共に、SVAもまた活動の場を難民キャンプからカンボジア、そしてラオスへと転換した時期でもありました。

発足以来貫いてきた私たちの活動に対する姿勢、「共に生き、共に学ぶ」。それは、苦難の中にある人々へ手を差し伸べるだけでなく、彼らと向き合う中で私たち自身が何を学び、どんなメッセージを発信し、どんな行動を起こしていくのか問い続ける誓いでもあります。私たちの周りでは、お年寄りや障がいを持った方たちだけでなく、若者や子どもたちでさえ生きることの意味、心の支えを見出すことに困難さを覚えています。そんな時代にあって、この使命の重さ、アジアの人々と手を携えることの意義を改めて感じています。

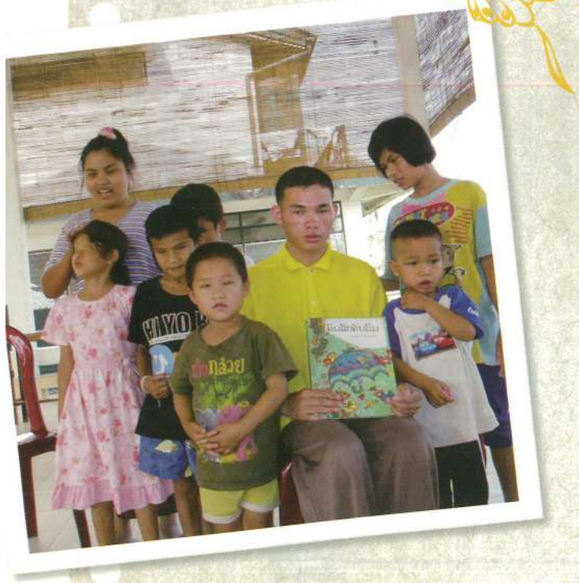
道なき道を歩み続けてきた27年目の今、SVAは組織運営の面においても難局を迎えています。それはより社会的な責任を果たしうる組織となるため、この時代における私たちの活動の意味を今一度胸に刻みなおすために与えられた試練であると受け止め、スタッフ一同、気持ちを新たに取り組んでいく所存です。幸いにして、「共に生き、共に学ぶ」社会に向けて想いを共にする会員や支援者の方が地方にも多くいらっしゃることが、SVAの強みであると信じ、皆さまと共にこの輪を拡げて参りたいと思います。

たくさんの方々からお寄せいただいているあたたかな志に対し、改めて感謝の念を捧げますとともに、これからも未来を担う子どもたちの夢と希望を共にお支えいただけますよう心からお願い申し上げます。

わたしが好きな絵本

my favorite book

特に好きだという『かさどろぼう』を持つニットさん（右から３人目）



名前はニット。24 歳。小学校４年生です。僕はヴィエンチャンからバスで 15 時間のウドムサイ県の村に生まれました。生まれた時から目が見えません。一昨年、ヴィエンチャンにある視覚障がい者の施設に来るまで外に出たことがなくて、ずっと家の中で座っていました。

目が見えないので絵本がどういうものかわからないけど、SVAのスタッフが読んでくれるお話は全部好きです。お話は、この世の中には僕の家族以外にもいろんな人がいて、いろんな生き物がいて、いろんな場所があって、そして僕の知らないことがたくさんあることを教えてくれました。

将来ですか？先生はマッサージ師になれると言っていました。でも他にもいろんな職業がありそうなので、ちょっと考えたいです。

今日は初めてのことばかりで緊張しました。自分のことを聞かれるのも、写真を撮られるということも。

（インタビュー：ラオス事務所　鈴木淳子）

【特集】

図書館活動の喜びを伝えたい

図書館活動に込められた復興への願い

――カンボジアでの9年をふり返って

国内事業課長　鎌倉幸子

鎌倉幸子（バンテイミンチェイ州の小学校を訪れて）

「ドドーン」。カンボジアの首都プノンペンに鳴り響く大きな爆音。外は30度を越えているのに、ゾクッと背中を走る緊張からくる悪寒。「市場にバズーカ砲が撃ち込まれた」と事務所の警備員が叫ぶ。事務所から市場までの距離は500メートル。逃げ惑う人々、泣き叫ぶ声、鳴り響く砲弾――。

1997年7月5日土曜日、政党同士の武力衝突が勃発した時、私はカンボジアにいました。当時24歳。学生インターンとしてSVAのカンボジア事務所に来て2カ月目のことでした。長い内戦を経験したカンボジアは、復興の途上、まだ混乱の最中にありました。平穏な日々はいつ来るのか、この悲劇をどうすれば止められるのかを繰り返し問いかけながらも、私は大使館経由で取れた飛行機のチケットを渡されカンボジアを出国するように言われました。

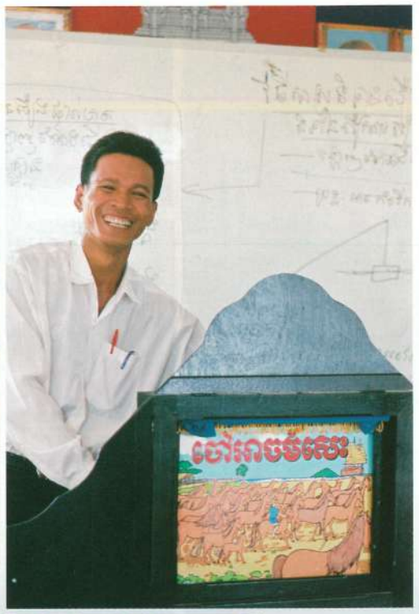
「内戦があったからこそ、心と心のふれあいを感じたいと皆願っている。図書館活動はそれができるのです」。そう語ってくれたカンボジア人スタッフの顔が浮かんできました。その笑顔と目の前に広がる現実。どちらが本当の「カンボジア」なのか。

次に戻ってくる時があれば、その答えを、図書館活動の意義をカンボジアの人びとと一緒に探したい、そう願いつつカンボジアを後にしました。

1999年4月、SVAの正職員として再度カンボジアの地に降り立ちました。図書館事業担当として、東京へ異動になる2006年12月まで、移動図書館、絵本・紙芝居出版、教員の研修会など様々な活動に携わりました。多くの人たちとの出会いの中で、図書館活動の意味を感じる毎日でした。

雨季のカンボジアの道路
泥にはまった車を引っ張ってもらう

配布された絵本を馬で持ち帰る



「おはなしと図書館活動研修会」に参加して紙芝居を練習する先生（写真＝瀬戸正夫）

研修会で絵本の読み聞かせを学ぶ

絵本を入れる手作りの本棚

字を知ることは、生きること

カンボジア事務所では、学校の先生への研修会を通じて絵本を配布しています。研修に参加し、絵本の意義や読み聞かせの仕方を学んでもらった上で学校に配布することで、絵本を教材として最大限有効に利用してもらうことを目的としています。ただ配布するだけでなく、本当に先生方が学校に持って行ったのか、使用しているのかを調べるために、研修会終了後3カ月以内にその学校を訪問しています。

2000年11月24日、首都プノンペンから100km離れたコンポンチュナン州に配布した本の使用状況を見に行きました。その学校は州の中でも非識字者が多い地域だったので、その理由を学校で聞くと、「字が読めなくても生活には困らない。だから人々は字を学ばない」と先生は言いました。

その日の午後、別の小学校を訪問しました。配布した本を見せてもらい、校長先生と今後の図書館活動の方法について話し合いをしました。帰る時間になり校舎の外に出ると、道路の端で寝転がっている15才くらいの男の子と母親がいました。「どうしたのですか」と皆で近づくと、母親は今にも泣き出しそうな顔で言いました。

「息子が1週間も前からずっとお腹が痛いと言っていて、町の医者に連れて行ったところなんです。医者に行った時は元気だったのに、帰る途中、また熱がではじめて、お腹が痛いって言うんだよ」

母親はずっと息子のお腹をさすっています。息子の額には脂汗が流れ、唇は乾燥しているためなのか白くなっています。

「何かお手伝いできることはありませんか」。そう聞いてみると、お母さんは言いました。「医者は薬をくれて、また痛みはじめたときの注意を紙に書いてくれたんだけど…。でも、私は字が読めないんだよ。医者の書いたこのメモを読んでくれないか。お願いだよ」――

字を知らなくても生きていくことはできるかもしれない。でも字が読めなければ、助かる命を救うことができない。

2006年のユニセフの統計によると、カンボジアの1歳未満の死亡率は1000人中65人（日本は3人）、5歳未満は1000人中82人（日本は4人）。母親に保健衛生の資料を配ってもその「字」が読めなければ、意味がありません。

小さい頃から「字」に触れる必要性を、この日ほど感じたことはありませんでした。字を学ぶことは生きることにつながる。その命を守るための教育を、図書館活動を通じて支えていきたいと強く願った日でした。

出版された『女神の舞』

カンボジアの民話を聞き取り

アンコールワットの壁画に刻まれた女神（撮影 瀬戸正夫）

ナロム先生

『女神の舞』を見ながら踊り始めた子どもたち

女神降臨——復興とは文化を伝えることなのだ

カンボジア事務所は1年間に絵本5タイトル（各3000部）、紙芝居3タイトル（各350部）を出版しています。その内容は、カンボジアの民話やアンコールワットの歴史、伝統舞踊など、カンボジアが誇る美しい文化を次世代に伝えるものが中心です。

「小さい頃寝る前に父母がよく童話を歌ってくれました。今、僕は父親になりましたが、歌詞がはっきり分からないのです」。そのスタッフは8歳でポル・ポト時代が始まり、両親は目の前で処刑場に連れて行かれました。「小さい頃何度も聞いた童話を子どもに聞かせてあげたい」。一人のスタッフの思いがきっかけとなって、村のお年寄りに聞き取りをして民話や童謡を集め、『クメールの民話』という本を出版しました。

1975～79年まで続いたポル・ポト政権下で、カンボジアの歴史や文化を記録した書物は焼かれ、歌手や作家、画家、彫刻家など芸術家の9割が命を絶たれました。美しい音楽、すばらしい芸術は人々の心に感動や喜びをもたらしますが、そのような感情は人間には必要ないとされていたのです。

ある日、絵本を担当するスタッフのポリーが、「芸術大学で伝統舞踊を教えているナロム先生が、突然声が出なくなったそうですよ」と他のスタッフに話していました。「何かあったの？」と聞くと、先生の生い立ちと苦悩について話してくれました。

ナロム先生は家族の中で唯一、内戦を生き残りました。舞踊家であったナロム先生がその当時ポル・ポト兵に見つからなかったのは奇跡的なことです。その後、芸術大学で女神（アプサラ）の舞を教えていましたが習うことができる子どもの数は限られています。還暦を過ぎ、あと何人に女神の舞を伝えていけるのかを悩む毎日。ある朝、目が覚めたら、声が出なくなっていたそうです。

「女神の舞を子どもたちに知ってもらえるよう、分かりやすく説明した本をナロム先生と作りませんか。先生は声が出ませんが、文章を書くのは問題ありません」。完成した本は、年間約150の小学校に配布されます。カンボジアの平和と繁栄を願う女神の存在を多くの子どもたちに知ってもらおう、スタッフの意気が上がりました。そうして先生の協力を得て、『女神の舞』という本を出版しました。

研修会では配布する本について説明する時間があります。その時の研修会にはバンテイミンチェイ州にある小学校の校長や教育局職員など100人が参加していました。いつもは文章を担当した作家が説明をするのですが、先生は声が出ないままだったので、ポリーの説明を隣で聞いています。しばらくすると先生はそわそわして落ち着かないようでした。突然、先生はポリーが持っていたマイクをぐいっと自分の方に引き寄せました。

「め、め、女神の壁画は、アンコールワットの回廊でも見られ…」ナロム先生の声が会場に響きました。皆もこの突然の出来事にびっくりし、目を大きく見開きました。

研修会の後、先生のそばに駆けよると、彼女は小さく震えていました。「子どもたちのための女神の本がやっと出版され、少しでも多くの子どもたちの手に届けたい。そのためには先生方にぜひそのことを伝えたいという思いが溢れて…。思わずマイクを取ったら声がでたんです」

数カ月後、ナロム先生の本が配布された小学校を訪れました。図書館の先生と会議をしている時に休み時間になり、子どもたちが図書室になだれ込んできました。一人の男の子が『女神の舞』の本を手に取り、ござの上に広げました。友人たちも、その本を囲むようにじっと読んでいます。その内、子どもたちが本に書かれている女神の舞の動作を真似しはじめました。ナロム先生がまいた小さなタネが、芽を出した瞬間に立ち合ったのです。

200万人以上の命が奪われた内戦を経て、生き残った人々が求めている復興とは、「失われた美しい文化や先祖からの叡知を次の世代に伝えること」。『文化の継承』はカンボジア人が一番焦りを感じていることなのです。それゆえに昔話を出版し、読み聞かせの方法を伝える研修会はどこでも好評で、SVAの図書館活動が受け入れられたのは、その点が考慮されているからだという声を何度も聞きました。

子どもにやさしい場所

朝6時半。小学校の前にたくさんの子どもたちが門の開くのを待っています。「さぁ、おはなし会を始めるぞ」。門が開き、先生が大きい声で子どもたちを呼びました。わぁっという歓声をあげながら子どもたちが大きな木の下に集まってきます。

「みんな、カンボジアの首都はどこにあるか知ってるかな？」

「プノンペン！」

「じゃあなんで『プノンペン』という地名になったのか分かる人？」

「？」子どもたちはお互いの顔をきょろきょろ見ながら、答えを考えています。

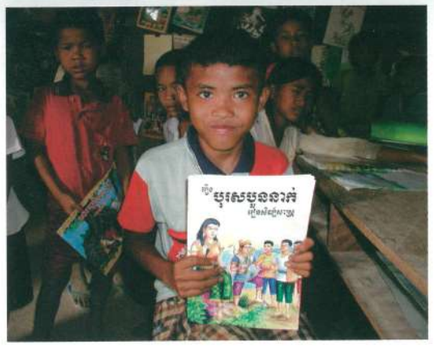
「今日のおはなしは、プノンペンに関する民話です。では、はじまり、はじまり」

その光景を見ながら校長先生が言いました。「昔は欠席する子どもが多くて、そのうち退学してしまうことも多かったのです。でも先生たちがおはなしをするようになると、学校が始まる前から子どもたちが待っているのです。子どもたちは自分から進んで学校に来るようになり、就学率が上がりました」

「おはなしをするのは子どもの笑顔を見たいから」。タイ国境にある小学校のチャン先生は言いました。この村に平和が訪れて10年。学校の回りはまだ撤去されていない地雷が残り、真紅の「地雷危険」の表示が所々に見られます。「この村の子どもたちは、目の前で惨劇を見て、それ以来心を閉ざしてしまったんです」。最初は睨むようにおはなしを聞いていた子どもたち。そのうちに一人、また一人と笑顔が見られるようになりました。「子どもたちが笑った！それを見た瞬間、泣きたいくらい感動して、それからずっとおはなしを続けているよ」。子どもが笑えば、大人が笑う。そうして村全体の雰囲気ががらっと変わったのだそうです。「これからのカンボジアに必要なことは、次世代を担う子どもたちが元気になること」と先生は話してくれました。

図書室は弟妹を連れて来る子どもたちの育児室にもなる。

子どもたちに慕われているチャン先生（左は先生の娘さん。『きょうはなんのひ』（福音館書店）を持って。）



4年生のカットヴァイくん（13歳）のお気に入りは、カンボジア民話の『魔法を勉強した4人組』

■カンボジアの子どもの就学率

◎小学校

男子 96%

女子 91%

◎中学校

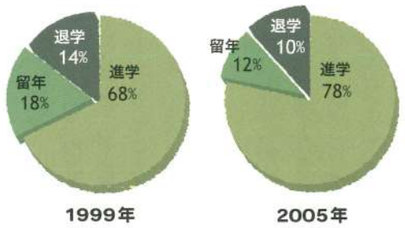
男子 30%

女子 19%

ここでの数字は、就学年齢にある子どもで学校に就学している子どもの人数を、当該年齢の子どもの人口で割った純就学率。

出典：ユニセフ「世界子ども白書 2006」

■カンボジアの小学校の進級・退学状況



出典：カンボジア教育省（1999年、2005年）

小学校1年に入学した子どもが5年生に在学する割合は61%。カンボジアの小学校では年度末に試験があり、合格すると上の学年に進級できる。不合格だと留年し、もう1年その学年で勉強しなければならない。教育環境は改善されていきているが、校舎や教員の不足、経済事情、その他の理由から退学する子どもも多い。

その後の休み時間、最初に飛び込んできた男の子、カットヴァイ君。両親を病気で亡くし、今はお兄さんに育てられています。彼にとって、絵本を読んでくれるチャン先生はお父さんのような存在。「将来は先生になりたい！」と目を輝かせていました。誰もが受け入れられ、子どもらしい好奇心を満たし、安心して過ごせる場所。チャン先生の図書館から元気な子どもたちの声が絶えることはないでしょう。

上＝カンボジアの田園風景
左＝通学の様子
下＝校舎の近くにもまだ地雷が眠っている

カンボジアでは現在も地雷除去作業が続く

絵本にこめた願い

「子どもたち一人一人が選ぶ本に意味があり、子どもたち自身の暮らしがあり、人生がある。それが本の選択に繋がり、また読んだ本がもしかしたら人生の選択に繋がるかもしれない。図書室という小さな空間が、いろいろな人の思いや人生を写し出している。その写し出す鏡を曇らせないように…。」私はカンボジアにいた時日記にこう記していました。

カンボジアの図書館活動は、文化を伝えたい人の思い、子どもの命を守りたい人の祈り、笑顔を見せてもいいんだよねと問いかける子どもたちの願いが込められていました。その思いを「共に生き、共に学び」ながら受けとめていきたい。絵本は小さな存在かもしれませんが、そこには深い願いと数字では表せない喜びがありました。

「絵本が好きな人は？」
「はーい。」

支えてくれた人たちに感謝して

2007年1月から東京事務所勤務となりました。気がつけば33歳。初めてカンボジアに行ってから9年がたっていました。この期間、私の生活は「カンボジア」一色でしたが、不思議と「疲れ」はありません。「一人でも多くの子どもの手に絵本を」と願い、一心不乱に一緒に仕事をした図書館事業課のスタッフ、カンボジアの学校の先生方、そして子どもの笑顔に支えられた9年間。そのなかで一番勉強をさせてもらったのは、日本人の私でした。

皆さんも、機会があればカンボジアを一度ご訪問ください。復興へのエネルギーを感じ、子どもたちの素敵な笑顔に会うことができます。そしてきっとたくさんの元気を訪れた人に与えてくれると思います。

鎌倉幸子（かまくらさちこ）
1973年、青森県生まれ。高校卒業後、アメリカで青少年福祉と異文化経営を学ぶ。1999年SVAに入職。カンボジア事務所図書館担当を経て、東京事務所海外事業課。2008年4月から国内事業課長。

絵本の喜びを伝えたい

10年目を迎える「絵本を届ける運動」

参加者の皆さんからのお手紙

10年前にバングラデシュの村を訪ねて

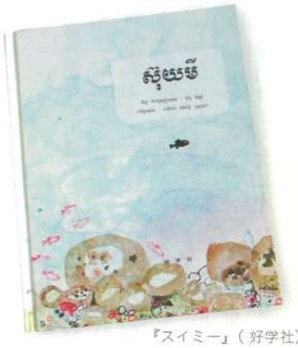
国内事業課長補佐 佐藤麻弥

もっとたくさんの絵本を子どもたちに

10年前、SVAは、日本国内の参加型の運動として、現在の「絵本を届ける運動」を立ち上げました。それまで地域の団体が行っていた日本の絵本に現地語の訳文を貼って海外の子どもたちに送る活動を、SVAとしてもっと広げ、安定した冊数の絵本を継続的に現地に届けていきたい、そんな思いからでした。

初年度の1999年は、カンボジアとラオスに、3485冊の絵本を届けました。翌年には、届けた絵本がどんなふうに使われているのかを見に行く「絵本ツアー」も始まったほか、ボランティアグループの「ハンカチの木」（千葉県柏市）と「おんなじ空ネットワーク」（長野県松本市）が、絵本の点検・修正作業を担ってくださることになり、その後年々増えていく絵本を受け入れる体制ができました。その一方で、「絵本を届けるみんなのきゃらばん」などを通じて、各地にスタッフが出向き活動報告を行い、参加の呼びかけも続けてきました。

2007年からは、新たにミャンマー（ビルマ）難民キャンプとアフガニスタンにも絵本を届けることになりました。昨年度に集まった絵本は1万6641冊。これまで9年間に届けた絵本は10万7652冊になります。日本各地の皆さんがこの運動に共感し、活動を広げてくださったことに感謝の気持ちでいっぱいです。



『スイミー』（好学社）

私の絵本との出会い

『スイミー』は、幼い頃から私の大好きな絵本です。母に読んでもらったり、部屋の片隅で一人で読んだり、小学校のクラスで劇をしたり（私は海草役）…。今から10年前、アジアの小さな村を訪ねる機会がありました。初めての途上国。子どもたちへのお土産に『スイミー』を1冊、スーツケースにいれました。「魚」「海」、絵本に出てくる言葉を現地語で覚え、村で会った子どもたちと一緒に絵本をめくりました。絵本と私の怪しい現地語に好奇心いっぱいの子どもたち。2002年、私はSVAに入職し、海外に届ける絵本が並ぶ倉庫の中で『スイミー』を見つけました。あの時の村の子どもたちの瞳の強さと熱気を思い出し、この運動を担当できることをとても幸せに感じました。

絵本に込めた思いとやさしさ

「絵本を届ける運動」に携わる中で、全国各地で絵本貼りをしてくださる方々と、直接お会いしたり、お電話でお話したり、時にはお手紙を交換させてもらったり、たくさんの方との出会いがありました。お子さんと絵本を読みながら、秋の夜長に音楽を聴きながら、久しぶりに会ったお友だちと、実家に帰省しておばあちゃんと、農作業の合間に。十人十色の絵本貼りの様子をお聞きするのが私の楽しみでした。「この絵本を子どもたちが読むと思うとわくわくします」、「子どもたちはどんな顔をするのかな？」、「絵本と過ごす安らかであたたかい時間を子どもたちに」。それぞれが海の向こうの子どもたちに思いを馳せながら作られた1冊の絵本をお預かりするとき、その価値と重みを感じます。そして、雨の日も風の日も、東京事務所に来られるボランティアの皆さん。家事、子育て、仕事、勉強、アルバイト、そんな合間をぬって「こんにちは！」と笑顔で事務所に来て、絵本の点検・修正をしてくれます。皆さんの熱い思いややさしさに支えられて、絵本は子どもたちに届くのです。

子どもたちの心に絵本のタネを

絵本を届けることはタネをまくことに似ています。日本の皆さんが心をこめて作った小さなタネ（絵本）を受け取った現地スタッフは、大地を耕し、タネを蒔き、水をやり、大切に育てていきます。教育事情の調査、先生への研修やその後の訪問、移動図書館活動などを通して、現地に図書館活動が根付き、子どもたちの心が育っていくのです。

そんなタネの成長を思い浮かべながら、これからも皆さんと一緒に絵本を届けていきたいと願っています。

SVA活動報告

activity reports

Thailand | タイ

33人の卒業生が集まり、
久しぶりの再会を喜び合った

シャンティ学生寮で同窓会を開催

1996年に第一期生が入寮した北タイ・パヤオにある「シャンティ学生寮」で、3月8日、卒業生が集まって同窓会が開催されました。この事業開始当初から支援をしてくださっているシャンティ山口と山口県曹洞宗青年会が開催費の一部を負担し実現したもので、支援者の皆さんも日本から参加してくださいました。

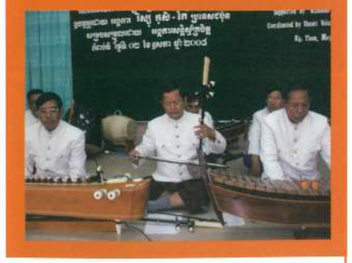
モン族、ミェン族出身の寮生たちは、タイとは異なる言葉、文化、宗教を持っています。彼らの生まれ育った村では学校でしかタイ語に触れることはなく、日常生活では民族の言葉を使います。彼らの村の多くは小学校までしかありません。町から離れるほど学校数は少なく、山の村の子どもたちが高等教育を受けるためには故郷を離れて下宿生活をすることになります。シャンティ学生寮は、こうした子どもたちの教育機会を拡大させるために設立されました。

卒業生には、故郷の村に戻って家庭を持ち農業をしている人、職業訓練の学校で技術を学び仕事をしている人、教員や保育園の先生になった人もいます。それぞれが寮生活を通じて学んだことを生かし、社会に貢献しています。

屋外に組み立てられたステージでは歌や寸劇、舞踊などが披露され、普段なかなか集まる機会のない卒業生が久々に集まり、近況を報告しあったり、後輩に経験を語ったりする様子が見られました。懐かしく楽しい交流は深夜まで続きました。

（SVAタイランド　江幡むつみ）

Cambodia | カンボジア



カンボジア芸術大学の教授による
伝統音楽の演奏

伝統音楽継承のための研修会

5月2日、立正佼成会の支援とSVAの企画により、カンボジアの伝統音楽継承のための研修会がコンポントム州で開催されました。州と各郡の中心的な僧侶、宗教局・文化局・教育青少年スポーツ局などの局長や職員、学校の先生など、354人が参加する盛大な研修会となりました。

SVAカンボジア事務所イー・トン副所長が、カンボジアの伝統音楽や舞踊の種類は数千種類もあること、それがいかに仏教を中心としたカンボジア人の生活の中になくてはならないものであったのかを説明して、伝統音楽を継承する重要性を強調しました。芸術大学の教授グループによる演奏・踊りも素晴らしく、目と耳と体で味わう研修となりました。

カンボジアでは昔から各村に伝統音楽を継承するグループがあり、それはちょうどお神楽やお囃子などを地域で伝承している日本の文化に似ています。かつては冠婚葬祭に欠かせなかったこの存在が近年少なくなり、CDの音楽を流して終わり、という様に変わってきています。また、今ではどんな農村部でも西洋音楽や流行の音楽のCDは簡単に手に入りますが、こうしたカンボジアの生の伝統音楽に触れる機会はますます少なくなってきています。

「異なる国の言語は理解できないが、音楽は理解できる。伝統音楽の継承はカンボジアだけでなく世界の文化にとって重要です」というイー・トン副所長の言葉が胸に残る研修会でした。

（カンボジア事務所長　磯部正広）

Laos | ラオス

子どもたちは絵本の読み聞かせを
楽しみにしている（撮影：齋藤沙里）

移動図書館車の行くところ

首都ヴィエンチャンでSVAの移動図書館車が走り始めたのは2004年。この間の首都の発展はめざましいものがあります。車やバイクが急増、信号機も増えました。ホテルや事務所もたくさんできました。TVも国営放送に加えてチャンネルが一つ増え、ケーブルTVでタイや世界中の放送が見られるようになりました。

でも、子どもたちに「家にどんな本があるの？」と聞いて「教科書！」という答えが返ってくるのは以前と変わりません。

首都でも図書室がある学校は少ないので図書館車は人気があります。週5日で10カ所から12カ所を巡回します。評判を聞きつけた小学校や施設からの要請が絶えません。図書館車は毎週決まった曜日の決まった時間に1時間から1時間半訪問します。待ち構えていた子どもたちは地面にゴザを敷き、本を降ろすのを手伝ってくれ、思い思いに本を読みます。活動に熱心な先生のいるところでは、先生を囲んでの読み聞かせの輪ができます。本を読むだけではなく、スタッフがリードする歌やゲーム、折り紙も普段の授業にはない楽しい時間です。

訪問先の学校は毎年変りますが、選ぶ基準の一つは経済的に貧しい地域の小学校ということです。学校以外に、視覚障がい児の施設、薬物中毒リハビリセンターなども訪問しています。いずれも本が少ないラオスでもさらに本に接する機会の乏しい場所が移動図書館車の活動の舞台です。

（ラオス事務所　髙橋久夫）

Myanmar (Burma) Refugees | ミャンマー（ビルマ）難民

普段、外に出ることができないキャンプ
を離れ、伝統楽器を演奏

みんなの心が一つになるとき

難民キャンプの各図書館では、カレン族の3つの伝統楽器と伝統舞踊の講座を毎週開いています。しかし、最近、第三国定住策の影響もあり、子どもたちの関心はタイや欧米文化に大きく傾いているようです。

そこで3月24～28日の5日間、SVAが活動する6つの難民キャンプの伝統音楽講師や図書館委員会メンバー、総勢40名がメラ難民キャンプに集まり、第1回伝統文化合同ワークショップを開催しました。

前半は、キャンプごとに歌と踊りを披露。その後、伝統楽器や太鼓、ギターなどの演奏と舞踊を合わせ、何度も練習を重ね、教材用のビデオ撮影を行いました。

メラ難民キャンプでダンスとカナ（カレン風マンドリン）の講師をしているチ・トゥイさん（19歳、男性）は、「他のキャンプの人たちが覚えている歌を知り、意見を交換することができてうれしかった。伝統音楽への関心は薄れているけれど、現代音楽と組み合わせれば、きっと子どもたちの関心は高くなる」と感想を話していました。

ワークショップに集まった参加者は、みなカレン族でも、キャンプや世代、使用言語も異なります。共に楽器を弾き、踊ることですぐに一体感が生まれ、後半の話し合いは活発な意見が飛び交いました。

難民キャンプにはカレン族以外にもビルマ族、ムスリムなどいろんな民族が暮らしています。芸術活動を通して、これらの多様な民族が共に理解し合えるような環境を作っていくことが今後の課題です。

（ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所　加藤美生）

Afghanistan | アフガニスタン

小学校の図書室で移動図書箱活動を行う

先生の研修を通じた図書普及活動を開始

昨年10月からJICA草の根技術協力事業として、ジャララバード市内の22の小学校を対象に「絵本を通じた図書普及活動」を開始しています。今後3年間に渡り、学校の教員や校長約1200名が図書活動に関する研修を受ける予定です。

事業開始に先駆けて、各学校図書室の状況調査を行いました。約8割の学校で図書室用の教室やスペースを設けているものの実際に機能している学校はわずかに2、3校。特に小学生の読み物が少なく、蔵書の約4分の1しかありませんでした。1校あたりの平均は140冊ですが、本がない学校も多いことがわかりました。

学校での図書活動推進の大きな課題は、教室や教員の数が慢性的に足りないこと。市内の学校の児童数は飽和状態にあり、3交替制あるいは4交替制を取っています。学校の規模は様々ですが、1校あたりの児童数は平均2400人。子どもは授業が終わるとすぐ下校し、次の子どもたちに教室を譲ります。放課後の時間はほとんどありません。

このような状況の下、限られた授業時間の中でも、図書室の設置や図書活動は、子どもたちが学んだことを生かしていく重要なものだと認識する学校も出てきています。教育局職員と連携を図りながら、アフガニスタンで初の図書活動事業が他県へも普及するようなモデルケースになるよう図書館事業スタッフは張り切っています。

（アフガニスタン事務所長代行　山本英里）

スタッフ日記 Staff Diary

SVAタイランド 江幡むつみの8日間

タイの新学期を目前にした5月上旬、バンコクと地方3県（ルーイ、スリン、パヤオ）で奨学金の授与式を行いました。8日間にわたる地方出張は、夜行の長距離バスが多く体力的には大変ですが、新学期を目前に張り切っている子どもたちに会える楽しみな出張です。

バンコク

5月3日 午前中、スアンブルー・コミュニティ・センターで奨学金授与式。タイ舞踊の披露や奉仕活動も行われた。式の後、奨学生一人ずつの写真を撮る。みんな緊張して表情が硬い。タイ語で話しかけていると自然な表情になってきた。昼過ぎに事務所に戻って写真の整理。OK。よく撮れていてほっとした。デジカメでも不思議と誰が撮っても同じというわけではないのが面白いと思う。いったん家に帰って荷造りと洗濯。夜8時、アルニー事務局長、休日を利用して事業を見学することになったスアンブルー保育園の園長と、事務所の車でいよいよルーイに向けて出発！

ルーイ

5月4日 朝4時半、ラオス国境に近いチェンカーン学生寮に到着。4時間ほど仮眠して、奨学生の家庭訪問へ。夕食にはメコンで採れた新鮮な魚の塩焼き、もち米、果物をいただく。翌日は奨学金授与式。ニコンの安江さんがバンコクに続いて参加してくださった。この日の夕食はスタッフみんなでメコン河沿いのレストランに行くはずが、午後の会議が長引いてキャンセル。こおろぎのから揚げを楽しみにしていたのに…。夜7時半、学生寮を出発。途中、屋台で夕食。深夜1時過ぎコラートに着くと、私はスリンに向かうため事務局長一行と別れてバス乗り場へ。どのバスも満席で仕方なく運転席のとなりの床に座っていくことになった。

スリン

5月6日 朝4時、まだ暗いスリンの町に到着。結局一睡もできなかった。さらに1時間車に乗り、バーンサワイ村へ。仮眠してから、洗濯や明日の授与式の準備。そのあとは涼しい図書館で読書をして過ごす。夜は、この周辺に住む元スタッフが集まってきてくれた。カオイダン難民キャンプ時代からの関係者も多く、昔話に花が咲く。7日の授与式には、開発僧のバンヤー和尚も参列してくださった。午後1時のバスに乗り、約8時間でバンコクの北バスターミナルに到着。スーパーセンターに寄って夕食をとる。

バンコク

5月8日 朝、体が重くベッドから起きられない。10時ごろ事務所に出勤し、メールチェック、写真の整理。夕方6時に帰宅して簡単な夕食をとったあと、バイクタクシーと乗り継いで、再び北バスターミナルへ。3連休前なのでバスやタクシーは渋滞に巻き込まれるのではと思っていたが、案の定、大渋滞。夜8時の夜行バスに乗る。

パヤオ

5月9日 朝7時過ぎ、シャンティ学生寮に着く。一番人数の多いパヤオ。さっそく書類の整理にとりかかる。夜、元スタッフが妻子を連れて遊びに来てくれた。お土産はモン族伝統のとうもろこしの焼酎。かなり強い。みんなでおしゃべりして、気がついたら0時すぎ。翌日は6時起床、水浴びをしてコーヒーを飲む。授与式後の写真撮影では、田舎の子どもたちほど「笑って！」と言ってもなかなか笑顔になれない。撮影が終わるとしゃべりすぎで疲れていた。その日の夜行バスでバンコクに戻る。道が空いていて約10時間で到着。家に着くと夕方まで寝てしまった。

今回8日間の移動距離は約3200km。陸路の移動は、体はきついですが、距離を肌で感じられて良いものです。同じタイ国内でも、それぞれ距離が離れているので食べ物や言葉、文化も違えば、子どもたちの顔つきも違います。今回撮った奨学生430人の写真は、プロフィールや子どもたちのお礼の手紙と一緒に、夏頃支援者の皆さんにお送りします。

ルーイ。上＝奨学生の家庭訪問。
下＝授与式の後はお寺と寮の整備をした。

上＝ルーイでの夕食
下＝（左から）差し入れのマンゴーと野生の鶏。村で飼っている豚をしめて作ったソーセージ。スリンの赤米は香りがよく、おいしい。

パヤオの奨学生と江幡（後列左端）

スリンの屋台
（図書館担当のアリッサーと）

夜行バス

文・写真：
江幡むつみ（えばた・むつみ）
東京出身。2001年SVAに入職。SVAタイランド奨学金事業担当。スタッフからは「ムー」と呼ばれている。

Japan | 日本

右上：「読むぜ、絵本！on theロック」安藤哲也さん
右下：「本と情熱のインドカリー」矢萩多聞さん
左上：「手のひら絵本の彩りサンド」田代知子さん
左下：「コドモ写真のさしすせそーす」川畑嘉文さん

シャンティ・カフェ ～ココロよろこぶ、おいしいジカン

4月1日より6月11日まで、日本生命のご協力により、ライフプラザ品川にて、アフガニスタンとミャンマー（ビルマ）難民キャンプの写真展と「絵本を届ける運動」の絵本の展示を行いました。また、気軽に寄っていただき元気になって帰ってほしいという思いから「シャンティ・カフェ」と称した5回のイベントを行い、5人のゲストの生き方レシピを紹介しました。

5月24日は安藤哲也さんのパパ流読み聞かせ会。ギターを抱えて歌も飛び出し、子どもたちは大喜び。父親の視点からの子育てのお話も大好評でした。5月29日は、これまで100冊以上の装丁を手がけてきた矢萩多聞さんが本作りの裏側を語りました。肌触り、色、フォント、私たちは五感で本を読んでいるのかもしれないということに気付かされるとともに、アジアでの出版文化を育むことの意義を語る矢萩さんの重みのある言葉が心に残りました。そして、5月31日は、田代知子さんによる一枚の画用紙から作るオリジナル絵本作りのワークショップ。上手に描くことよりオリジナルに価値がある、閉じこもらずに自由な発想で描きましょう、という田代さんの言葉もあり、ユニークな作品がたくさん生まれました。6月7日は、写真展にも写真をご提供くださった川畑嘉文さんが作品をスライドで映しながらのトークショー。訪問先の国々で、子どもたちのくらしに寄り添い、まっすぐに子どもたちと向き合う姿勢や、見る人に想像させる写真を撮りたいという言葉が印象的でした。最終日は山本英里スタッフが5年半のアフガニスタン生活の中で見たこと、感じたことを等身大の言葉でお話しました。

ゲストの皆さんのそれぞれの視点に立った子どもたちへの思いが溢れる中、全イベントを通じて参加者の方々とシャンティな時間を共に過ごすことができたことを嬉しく思います。多くの方との出会いの場となる「シャンティ・カフェ」をこれからも様々な場所で続けていきたいと願っています。

（国内事業課広報担当　佐藤麻弥）

「世界一大きな授業」日本全国で214校2万5838人が参加

上：ユニセフ教育部長のクリーム・ライトさん
下：中学生に授業をする山田心健スタッフ

SVAが事務局を務めている教育協力NGOネットワーク（JNNE）の主催により、4月23日、世界で200万人以上が参加してギネス記録の更新をめざす「世界一大きな授業」が行われました。日本では全国の214校、2万5838人の小・中学生が参加しました。

東京の本郷台中学校では、1年生と3年生の5クラスを対象に、JNNEに参加するNGOの職員が講師を務め、教育の機会を奪われている子どもたちや質の低い教育の現状について授業を行いました。

同時期に東京で開催されていたG8サミット関連の教育協力についての国際会議の参加者、国連機関の代表20名もゲストとして招かれ、子どもたちと一緒に授業を受けました。ユニセフ大使である歌手のアグネス・チャンさんも、生徒と給食をともにして授業に参加。それぞれのゲストから世界の子どもたちの現状と教育支援の必要が訴えられました。

生徒たちは、同年代の少年兵士や少女の早すぎる結婚の写真に目をみはり、教育が受けられないことなどについて、活発にグループ・ディスカッションを行いました。

同日に行われた高村外務大臣による教育協力についての政策演説の冒頭でも「世界一大きな授業」について触れられました。

（企画調査室長　三宅隆史）

SVAからのお知らせ

2008年度 通常総会を開催

3月29日、SVA2008年度総会を開催し、会員の皆さまに2007年度の事業と決算を報告し、審議を行いました。

2007年度の事業は、国内においては支援者との「顔が見える関係」づくりを中心課題に、チャイルド・ブック・サポーターイベント、スタディツアー、チャリティ寄席や代議員のつどいを実施しました。また海外の現地スタッフの研修、広報と情報管理の強化を行いました。

一方2007年度決算では、会費収入は前年度並みでしたが、近年一般募金収入が落ち込み、一部の公的資金が取れなかったことから収支が悪化し、基本準備金2100万円の取り崩しを行いました。また過年度の経理処理におけるミスが判明したため、今後の内部のチェック体制と監査方法の見直しを検討しています。これまで一般事業会計に組み込まれていた緊急救援事業は、2008年度からは特別会計とし、より明確な決算を行うようにしました。

以上のような事務局からの報告に対して、会員の方からは、「収入に見合った事業規模を検討するべき」「管理部門の強化を」「賛同者を増やす努力と焦点をしぼった支援の呼びかけをしてはどうか」などの意見があがりました。

事務局の運営強化や財政問題への取り組みについては、さる3月26日に理事とスタッフ合同のミーティングをもち改善策の具体案を検討し、今後実現をはかる方向です。SVAの事業は、調査・計画の上、実施、評価を行っておりますが、収支のバランスを鑑みて今後の計画と予算に反映し、財政改善に努力したいと考えています。

総会の最後に新専務理事の選出について提案され、近畿大学の教授として就任することになった秦辰也専務理事の後任として、茅野俊幸事務局長が選ばれました。

なお、事務局長の後任は、関尚士（前国内事業課長）が務めます。今年度は特に、海外事業の質の向上と、国内の「共感を得る」運動体として活動を広げたいと考えています。

information & event

バングラデシュおよびミャンマー（ビルマ）・サイクロン被害支援

昨年11月に発生したバングラデシュ・サイクロン被害、今年5月2日に発生したミャンマー・サイクロン被害の支援活動を行っています。

バングラデシュでは、被災地域の集会所の建設、学用品の配布を終了し、サイクロンシェルター（避難所）の建設が続いています。ミャンマーでは、現地の協力団体と協力し、緊急支援物資の配布を行っています。

多くの方から募金のご協力をいただき、ありがとうございます。事業の詳細は、同封のチラシまたはホームページをご覧ください。

担当◎緊急救援担当　木村万里子・白鳥孝太

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪問するスタディツアーのお知らせ

2008年11月22日～27日（予定）、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪問し、現地の図書館活動の見学や子どもたちとの交流を行うスタディツアーを実施します。途中、映画「戦場にかける橋」で有名なカンチャナブリの鉄橋と戦争博物館も訪れる予定です。現代の難民問題についても考える旅です。詳細は同封のチラシをご覧ください。

担当◎チャイルド・ブック・サポーター担当　佐藤宣子・服部貴子

SVA専門アドバイザー制度スタート

SVAが国内外で取り組む国際協力事業に対し、専門的な立場から適切な助言や指導を行っていただくことを目的として、「SVA専門アドバイザー」制度を設けることとなりました。本年5月1日よりご就任いただいたアドバイザーの皆さんと各専門分野は次のとおりです。（敬称略）

佐藤凉子（明治大学非常勤講師・図書館活動専門家、図書館活動）
瀬戸正夫（朝日新聞バンコク支局顧問、広報）
田尻佳史（日本NPOセンター事務局長、NPO/企業/行政間協働）
田中弥生（大学評価・学位授与機構准教授、非営利組織運営・評価）
永堀宏美（元牛久市教育委員長、参加型学習・広報）
松尾純代（大阪市こども青少年局子育て支援部副参事、幼児教育・図書館活動）

人事

<入職> **塚本 真衣子**　海外事業課カンボジア担当（3月17日付）

<異動> **八木沢 克昌**　カンボジア事務所長から アジア地域ディレクターへ（5月1日付）

磯部 正広　経理・総務課長からカンボジア事務所長代行（4月1日付）、カンボジア事務所長へ（5月1日付）

山本 英里　（海外事業課アフガニスタン担当） アフガニスタン事務所プロジェクトマネージャーから アフガニスタン事務所長代行へ（6月1日付）

市川 斉　（事務局次長 兼 経理・総務課長） アフガニスタン事務所長を退任（6月1日付）

スタッフのひとこと「出張」

■毎年、民族の不思議と伝統を探しに、クラフト生産者を訪ねます。今夏はタイ北部のミェンの人やアカの人、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプのカレンの人に逢ってきます。どんな珍道中になることやら、秋号での報告をお楽しみに。（クラフト・エイド担当　神崎愛子）

■宗教部門担当として各地のお寺を訪ねています。SVAの募金箱を修理して大切に使っているお寺。街角に悩み相談所を設立した僧侶など。じかにお会いして元気をいただくことしばしばです。このような顔の見える関係をさらに大切にしたいと思います。（宗教部門担当　大菅俊幸）

■1～2カ月に一度、1週間から1カ月ほどアフガニスタンへ出張します。住んでいた時よりも、街並みや人々、子どもたちの変化が面白いほど目に入ってきます。7000m級の山を越えてジャララバードの緑の街並みが見えてきたとき、何となくホッとします。（アフガニスタン担当　山本英里）

■**編集後記**　高校生のとき、毎日学校の図書館に行きました。司書の先生や友だち。本を借りたり、おしゃべりしたり。3年間図書館の魅力にはまっていました。いまSVAの活動に、その体験を重ねています。図書館活動の喜びを海外の子どもたちに、そして会員の皆さんに伝えたいと思います。（村田泉）

ご意見・お問合せ・入会の申し込みは

社団法人・特定公益増進法人
シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03－5360－1233
FAX 03－5360－1220
WEB http://www.sva.or.jp
E-Mail info@sva.or.jp
郵便振替 00150－9－61724

「シャンティ」は、FSC森林認証紙（SGS-COC-1773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

シャンティ

2008年7月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻247号
1985年6月28日第三種郵便物認可

発行所 社団法人シャンティ国際ボランティア会
発行人 若林恭英 ／ 編集人 関尚士
装丁・デザイン 矢萩多聞 ／ 印刷 株式会社大川印刷

定価 550円（税込）